



一般社団法人 **日本LD学会**
Japan Academy of Learning Disabilities

会 報 第119号

一般社団法人 日本LD学会 事務局（業務委託先）

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター（株）国際文献社

URL <https://www.jald.or.jp>

- ・巻頭言：特別支援教育、発達障害支援の新たな課題
- ・第30回大会（神奈川）開催報告
- ・第30回大会（神奈川）印象記
- ・〈連続講座〉新学習指導要領時代における学びの多様性を生かすための一貫した支援
- ・〈大会特集〉第5回研究集会（熊本）事前講義
- ・委員会リレー企画 LD-SKAIP委員会紹介
- ・PATIO～実践の最前線～



特別支援教育、発達障害支援の 新たな課題

一般財団法人特別支援教育士資格認定協会 理事長

関西国際大学教授

花 熊 暁

多様性を尊重する「共生社会」の形成が目ざされ、学校教育の領域ではインクルーシブ教育システムの構築が求められている現在、発達障害の子どもたちの支援にも新たな課題が生じています。

第1は、新しい学習指導要領や2021年1月の中教審答申に示された「子ども中心の学びの在り方」を、発達障害の子どもたちにどう保障していくかという課題です。

特別支援教育が始まった当初、学校で支援の対象にされたのは行動面や学校生活面に困難がある子どもたちでした。2010年代に入ると、学習面の支援が課題とされるようになりましたが、それはまだ「学習上の困難をどう支援するか」のレベルにとどまるものでした。

しかし、いま求められているのは、困難の支援に加えて、発達障害の子どもたちの特性に合わせた「個別最適な学び、学習の個性化」をどう図っていくかということで、別の言葉で言えば、発達障害の子どもたちの個性・特性を生かした「得意を作る」学習をどう進められるのかということではないかと思います。このことは、単に学校での学習にとどまるものではなく、将来の社会的自立、就労にもつながっていくことです。

第2の課題は、発達障害の子どもたちのセルフア

ドボカシー（自己権利擁護）の力をどう育ていくかということです。周囲の人たちが「どう支援するか」だけでなく、発達障害のある子どもたち自身が、成長・発達の過程で、自分の得意や苦手を知り、自分に必要なサポートは何かを理解し、周囲の人たちにサポートを求め、その理由を自ら説明できる力を育てていくことは、社会的自立に必要な不可欠なことでしょう。

これらの課題を受けて、S.E.N.S協会では、特別支援教育士（S.E.N.S）が目ざすものとして、①多様性を互いに尊重しあえる学校・園、社会の形成、②すべての子どもたちが学校・園での活動に参加でき、充実した生活を送れるようにすること、③学びの多様性の観点から、子ども一人ひとりの学び方の違いに応じた学習支援の実現、を挙げています。

会報118号で、小野先生が「LD学会とS.E.N.S協会の二人三脚が重要」と述べておられたように、新たな2つの課題について、LD学会が研究の側面から、そして、S.E.N.Sの方々が支援実践の側面から、それぞれに取り組み、その成果を相互還流することで、発達障害の子どもたちへの支援の質がさらに高まり、子どもたちの充実した生活につながっていくことを願ってやみません。